シリーズ

上宮王家の悲劇

その4 暗殺された天皇

Aブロック担当　副会頭
「輝くなにわ」編集委員長　野瀬 泰良
（霊園経営者）

西暦587年、用明天皇の崩御とともに、仏教を我が国に入れるのかどうかを絡めての政権争いが高じて遂に物部（もののべ）、蘇我の間で戦争となったのだが、それにしても国軍を統帥してきた物部がこれほど蘇我に惨敗するとは神仏のみが知ることだった。蘇我馬子でさえ、これは厩戸（うまやと）皇子（後の聖徳太子）による仏を守護なさる四天王への戦勝祈願が天に届いた奇跡だと思えたほどである。だが戦が終わってみれば、敵の大将を狙撃した将兵の手柄も、厩戸皇子の信心の功徳も次第に忘れられ、次の大王（おおきみ天皇）のことのみに世間の関心が集まるのだった。

物部滅亡後に手を結ぶ蘇我氏と大伴氏

話は遡るが、大王家（皇室）を支えてきた連（むらじ）と呼ばれる豪族の筆頭、大伴氏に推挙され、皇族の末孫の身ながら継体帝が即位なされた話は既に述べた。それから四半世紀の後、継体帝が崩御されると、532年、蘇我稲目は反大伴勢力を結集し、大王家の血筋を引かれる皇后からお生まれになった第三子の欽明天皇を担ぎ上げ、大伴氏から政権を奪い取るのに成功した。

ところがその翌年、その即位は先帝のご意思にあらずと、長兄の安閑帝が対抗する形で即位なされた。中世の南北朝の如く、古代日本にも二朝並ぶ時代があったのだ。高齢だった安閑帝は2年後に崩御なされ、同腹の弟君、宣化帝がその後を継承なされた。

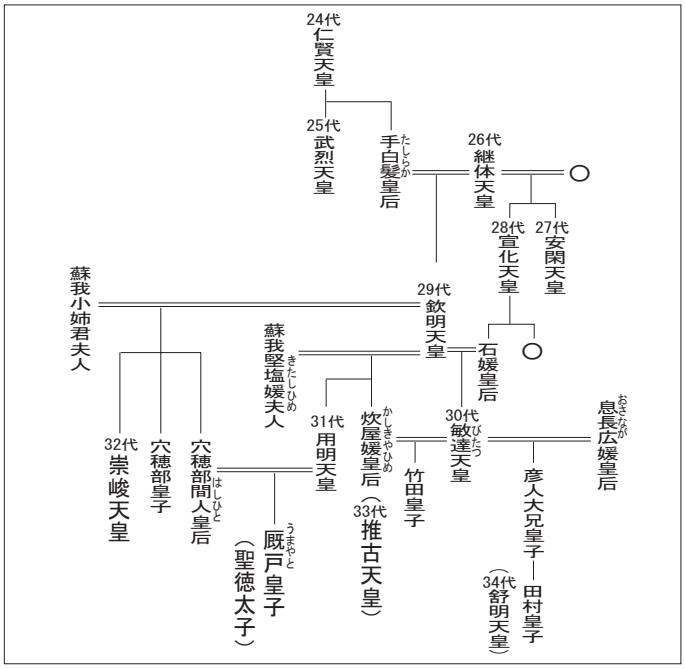
さて538年、仏教を伝えるため渡来した百済（くだら）の使者を謁見されたのは、盆地南端の山城に立て篭られる宣化帝ではなく、三輪の磯城嶋（しきしま我国を敷島の国と呼ぶ由来）の宮の欽明帝であった。そのことを見れば両朝の力の差は歴然としていた。そして2年後、宣化帝は皇子様とともに謎の死を遂げられ、安閑宣化王朝はあっけなく消滅した。ところで欽明天皇は、26代継体帝の在位とご自分の在位の間に、二人の腹違いの兄君の在位を扶み入れ、自らを29代の大王（天皇）と記録させられた。為に欽明帝の治世は実際よりも短くなり、又仏教伝来の年は欽明帝の治世ではなく、宣化帝の治世になるという矛盾が生じた。更に不思議な事に、欽明帝には多数の妃や夫人がおられたが、宣化帝遺児の石媛様を皇后となされ、その子を皇太子（敏達帝）にされている。これらのことは欽明帝には、少なくとも亡くなられた両帝へのよほどの鎮魂の意志があったに違いない。このような事情で大伴氏は蘇我氏に長く反目してきたが、物部討伐戦争に共に勝利したことで、手を握り合って政権を獲得することになった。

泊瀬部（はつせべ）の大王（おうきみ）（崇峻（すしゅん）天皇）の即位

大伴氏が新帝に推すのは、自ら物部討伐戦争を戦われた泊瀬部皇子である。討伐軍の旗頭に推され、本来なら勝利の暁に真っ先に新帝として即位されるはずの竹田皇子様は、戦の負傷がもとで遂に薨去（こうきょ）なされたのだ。

もう一人の大王候補は、敏達帝と初めの皇后、広媛様との間のご長男、彦人大兄（ひこひとのおおえ）皇子になるだろう。皇子は炊屋媛様に命じられ、戦の間、物部の手勢から身を隠しておいでになられた。だがそのどちらつかずの態度は、圧倒的な蘇我側の勝利に終わってみれば、世間から白い目で見られることになった。事実この皇子はどちらの陣営からも新帝に推される可能性を持っておられた。彦人大兄皇子は世間の冷たい視線から逃れるように、まだ幼いご長男の田村皇子様を都に残して、大和を後にされた。

大伴氏が泊瀬部皇子を大王（天皇）に推したのは、大伴家から小手子様という妃（みめ）を以前から皇子に嫁がせていたからだ。政権安定のため、ここは馬子も泊瀬部皇子を推さざるを得なかった。だが馬子はさるもので、皇子が32代の大王、崇峻（すしゅん）天皇として即位なさると、ちゃっかり娘の河上郎女（かわかみのいらつめ）を妃として差し出したのである。



泊瀬部大王（崇峻天皇）の軍制改革

泊瀬部大王（崇峻天皇）は即位なさると、直ちに蘇我馬子の領地内に法興寺（飛鳥寺）の建設を許可なされた。かくして倭国が仏教国に生まれ変わる日が来たと思われたのだが、新帝が着手なされたのは仏教の公認よりも物部軍無き後の国軍の編成であった。新帝は譜代の豪族に兵を集中させて皇室や国土を守らせるのではなく、大王自らが国軍（官軍）を指揮する国に改革しようとなされたのである。大陸の華北に興った隋帝国や、半島の高句麗、新麗、百済などの国情が、次第に我国に知れ渡ると、帝が着目なされたのはそのような諸国の国軍の在り様だった。帝は国中の豪族たちから満遍なく将兵を出させ、帝自ら直接指揮なさる2万の官軍を編成なされた。

崇峻帝は物部の中河内や西大和の領地は残らず没収なされたが、大和の石上（いそのかみ　天理市）で皇室の祖霊を祀る物部残党の神官たちには領地を安堵なされた。そのことは蘇我に敵対した物部氏と

我が国の国際化を望まない保守的な神社勢力がまたもや息を吹き返すことにならないかと馬子を不安にさせた。圧倒的な勝利者の蘇我に決して抜きん出た力を持たせず、大伴や物部などと同格に押さえ込もうとなされる崇峻帝の思惑が、馬子にはみえみえであった。もしも側近の讒言（ざんげん）などによって、帝が少しでも心変わりなされば、蘇我氏はたちまち逆賊にされ、討伐の対象になるかもしれず、仏教徒もいつまた弾圧されるやもしれぬと考えると、仏教と蘇我の一族を守るために馬子は次第に新帝を警戒するようになった。

暗殺された崇峻天皇

即位から3年後の591年、帝は父欽明帝の遺言であった朝鮮の任那（みまな）奪還を思い立たれ、軍を総動員して北九州に派遣されることになった。2万の国軍が北九州に駐屯し、新羅（しらぎ）と対峙しながら渡海の機会を窺って一年が経過した。軍隊の姿が見えず大和盆地に平和な日々が続く中、崇峻帝には物部の娘、石上（いそのかみ）神宮の巫女をその美しさを愛でて妾となされ、以後は河上郎女妃も小手子妃も共に顧みられなくなるほどのご寵愛ぶりであった。

「このまま物部の巫女を王宮におかれるのなら、帝は崇仏から排仏に変わられるかもしれません」と、嫉妬に狂った小手子妃から大臣の馬子に讒言（ざんげん）があった。また時を同じくして、今度は厩戸皇子の舎人（とねり）の中に、帝が厨房で食材として置かれた猪を見つけられ、その首を刀剣で斬り落とすまねをされ、「このように朕（ちん）の敵を断てるなら」と客人たちに気を許しておっしゃった様を大臣の馬子に密告した者がいた。「朕の敵」とは自分のことだと馬子は思うしかなかった。崇峻帝が崇仏から排仏へ方針を変更され、蘇我討伐に出てこられるのもそう遠くはなさそうだ、と馬子は覚悟した。そうなる前に先手を打たねばならなかった。

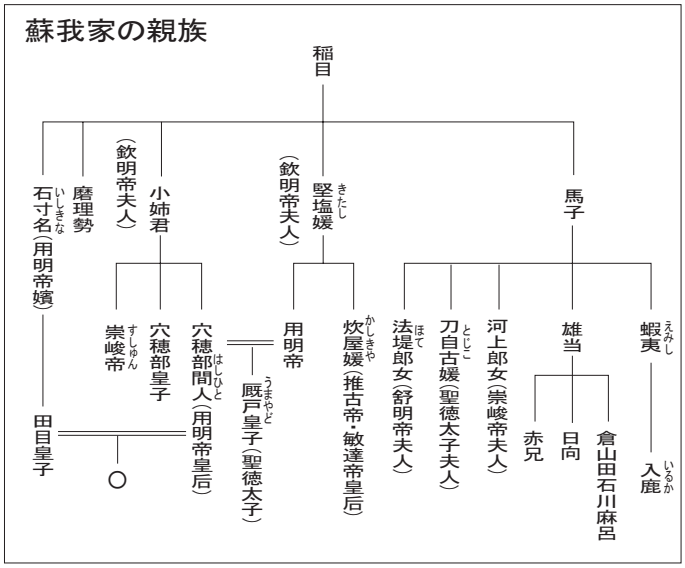
それから数日後、東国からの貢物を運んで王宮に入った東漢直（やまとのあやのあたい）駒という渡来系豪族の男が、妃や妾たちの前で天皇を斬殺するという前代未聞の事件が起こった。しかもその後、犯人の駒は悪びれもせず、報奨でもいただくように妃の河上郎女様を抱きかかえ、喜び勇んで私邸に帰ったというのである。

数日後、東漢直（やまとのあやのあたい）駒は馬子の手勢によって逮捕され、直ちに処刑されることになった。駒は、「俺は一体何の罪で処刑されるのじゃ? 俺は大臣殿の命令に忠実に従っただけなのじゃ」と見物人に事件の真相を暴露した。よって死刑執行官の馬子は、天皇暗殺の罪だけで駒を処刑することはできなくなった。仕方なく馬子は「こやつを処刑するのは、いと尊き方を弑（しい）し奉った（身分の高い方を殺害した）罪に加え、恐れ多くもその妃（みめ）様を私邸に拉致し奉り、その尊き清らかなお体を犯し奉った罪によるものじゃ」と見物人に言い聞かせた。「犯し奉った?…なんのことじゃ?…… そもそも郎女は大臣殿がこの俺に…」と駒が言いかけるのをさえぎって、『黙れ、黙れ、この極悪人めが』と馬子自ら矢をつがえ、柱に縛られた駒に駆け寄り、その胸を何度も撃ち抜き、口を封じてしまった。

筆者が想像するに、河上郎女は崇峻帝の妃となる前は恐らく東漢直駒の婚約者か恋人であったのであろう。思索に抜かりのない馬子のこと、人の心理を知り尽くして刺客を人選し、ことが成った後の彼の行動をも計算して、それすら都合よく利用しようと熟慮を重ねていたのであろう。

炊屋媛（かしきやひめ）陛下の苦汁の決断

天皇の暗殺を命じたのは蘇我馬子だったと世間が知ると、今にも北九州から2万の官軍が蘇我討伐に攻め上がって来るのだとの噂でもち



きりになった。だが九州の官軍は動かず、いつまでも半島の新羅軍と対峙し続けた。そこでようやく世間は、馬子が皇室後宮を差配される炊屋媛陛下から、事前の了承を抜かりなく取り付けていたことに気づくのであった。

馬子が炊屋媛陛下の王宮を訪ねたのは、駒に崇峻帝の暗殺を命じた当日だった。馬子は自分が刺客を放ったと自供した上で、堂々と前皇后陛下に大王殺害の承認を求めたのである。炊屋媛陛下には苦渋の決断であった。

（一体大王にどんな罪があるのだ。国全体に良かれとした軍制改革が、個である蘇我を脅かしたにすぎない。だが既に刺客が放たれた以上、それを議論しても始まらぬ。こうなった上は、大王殺害を承認しなければ、九州から2万の国軍が蘇我討伐に戻って来よう。そうなれば国内は大混乱となり、どれだけの多くの人々が命を無くすことか。それこそ侵略の機を伺う新羅や高句麗の思うつぼではないか。蘇我が生き残るため、一体幾人の皇族の血を流さなければならないのだろう。

皇族と一口に言っても、即位なされた方を殺害するのは前代未聞ではないか。否そうではない。記録上はそうかもしれないが実際はそうではないだろう。祖父の稲目殿も、蘇我と仏の前に立ちはだかる者あれば、たとえ大王でも后でも皇太子でも、情け容赦はしない決意で生き抜かれたに違いない。仏教をこの国に残すには蘇我を残すしかない。だが蘇我の御陰で仏教がいかに栄えようが、既に可愛い竹田を失った自分を含め、蘇我一族が因果応報の罪悪を免れることはないのだ。他の者も必ず報いを受けるであろう。それが国政を担う者たちの宿命なのだ。）

思案と覚悟が定まると、遂に陛下は重い口を開かれた。「大王に代わって王家を束ねる者として、心を強くして申しましょう。もう今頃は大王陛下には既にお崩（かく）れになっておられるのかもしれぬが、大臣殿、そなたの申し出は承知することにしました。早速、筑紫に派遣している兵たちに、都での出来事に動揺せず、冷静に任務を遂行せよ、との命令書を認（したた）めましょう。」

蘇我馬子が炊屋媛前皇后陛下の足下に額ずきながら、この方以外に次の大王（天皇）になっていただく方はいないと確信した瞬間であった。歴史が生まれたこの時、炊屋媛陛下は御歳39歳。蘇我馬子42歳。翌年の上宮太子、厩戸皇子は19歳。この頃、光明燦然たる太子の人生に暗い影を落とす出来事が起こっていた。それは母親が先夫・用明帝の先妻の息子と恋愛し、地位も名誉も捨て愛する人の子を生むという女の幸福を選んだことである。（次号に続く）

（次回予告）女帝と太子による天皇帰一国家の草創